

佐野先生の追憶

阿部, 重夫

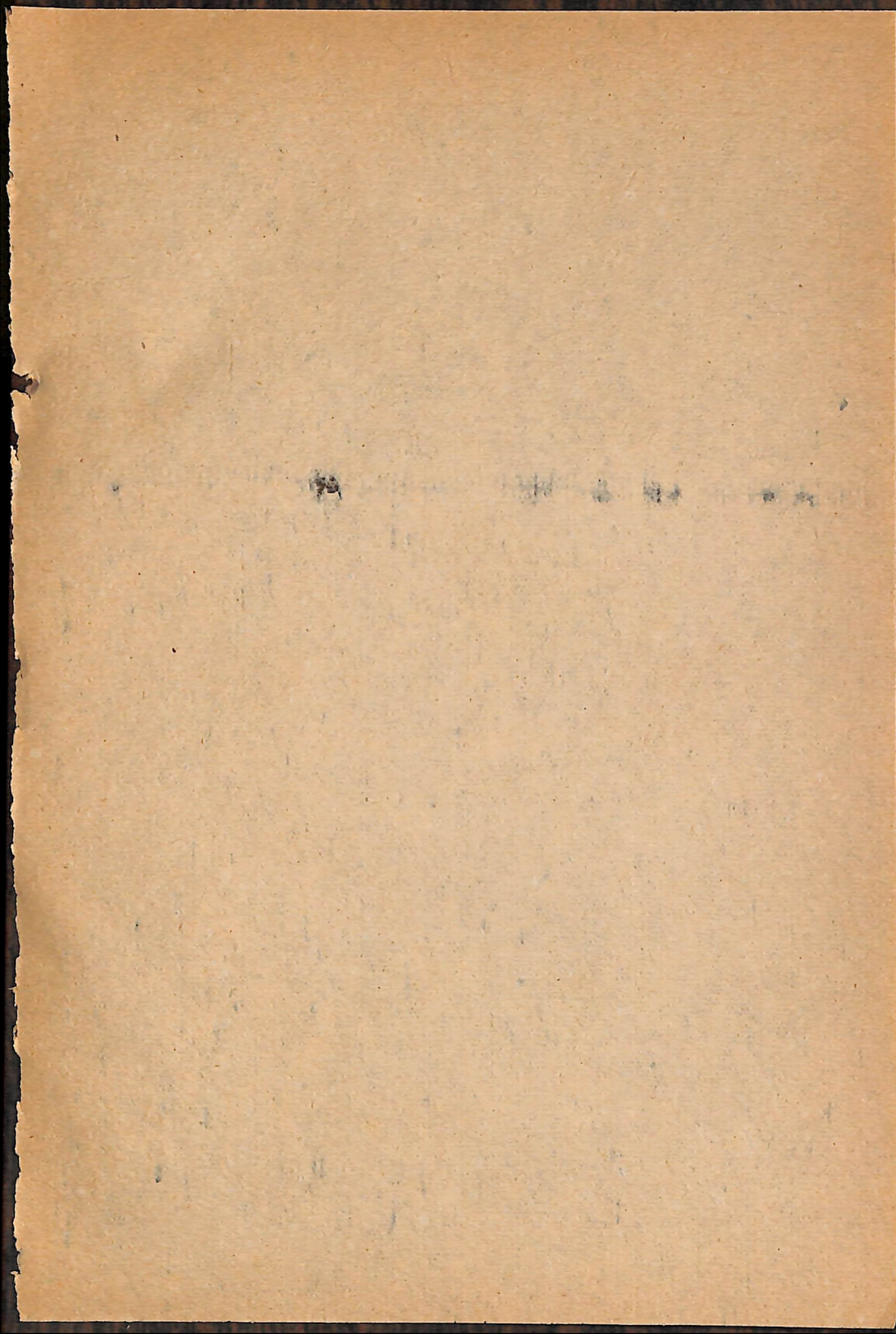
<https://doi.org/10.15017/2544323>

出版情報 : 哲學年報. 6/7, pp.209-220, 1948-06-05. 九州大学法文学部
バージョン :
権利関係 :



佐野先生の追憶

阿部重夫



今度哲學年報が故佐野教授の記念號として出版されるについて、編輯委員の方から先生について何か書くやうに御依頼があつた。それは恐らく私が門下生の一人として比較的早くより先生に接し、殊に先生の晩年まで直接指導を仰いでゐたがためであらうと思はれる。しかし人について語るといふことは實は仲々容易のことではなく、殊にその全貌を正しく傳へることは到底一人の人間のよくなし得るところではなからう。成程私自身は學生時代以來陰に陽に先生の篤い御庇護と御指導とを忝うして來た者の一人ではあるが、私の先生との接觸は主として學問を通して行はれた。しかも同じく宗教學と云つても直接の研究領域は先生と私とは同じくはなかつた。それ故今先生の領域に深く立入つてその眞面目を残すところなく正しく傳へることは到底私の任とし得るところではない。又先生は熱心なキリスト教徒であられた。そしてキリスト教研究を通して得られた純化せる信仰をもつて人を導き、世を益するといふ實踐的意欲を持つてゐられた。さうした意欲は晩年一層強めてゐられたやうに思ふ。さうしたところから信仰を求める人々にキリスト教を語り、又さういふ人々と屢々修養を共にする機會を持たれた。しかし私はさういふ席に列したことは一度もなかつた。私が先生に接して以來十餘年の間、先生はかつて一度たりとも私にキリスト教信仰を勧めることはなさなかつた。それで私は信仰問題について先生と語る機會は殆ど全く持たなかつたと云つてよい。それ故先生にとつて謂はゞ異教徒である私は先生を語る上に逸し得ないこの方面について語る資格を全く缺く者である。のみならず私は今私に與へられた紙數と時間との制約下にある。このやうにして私がこゝに述べようとするところは先生を語るには餘りにも不完全なものたるを免れ得ない。私はこゝに先生の人物評論を試みようとするものではない。たゞ私の知る限りの先生の閱歷、人格及び學問上の業績や學風等について素描を試みる

ことによつて私の當面の責めを果すに止めよう。

先生は明治二十一年五月十五日に熊本縣下益城郡小川町にお生れになつた。十歳の折、父君を喪はれてから艱難な道が開けた。十四歳で土地の高等小學校を卒業されたが上級學校へ進學のあてもなく、直ちに熊本市に出て一二の職に就かれた。これからの數年間は御生涯の失意時代と云へよう。伸びようと欲して伸び得ない境涯に身を置くことは精神的に大なる苦痛であつたに違ひない。しかし旺盛な好學心は大きな障害を乗越え、意を決して長崎の鎮西學院に進まれた。こゝでの學窓生活が眞に愉快なものであつたことについては後年「思ひ出の丘」(宗教と人間)に於て述懐してゐられる。又こゝでキリスト教々育を受けられたことは先生の信仰と學問の方向に決定的影響を及ぼした。四年間の課程を卒へて、やがて一高を経て大正六年八月東大を卒業された。この間も學資の点で苦勞されて、中學卒業後半年ほど小學校に勤めねばならぬやうなこともあつた。それで高等學校から大學までの學資も他からの援助に俟たねばならなかつた。先生は苦學力行の士といふ言葉は自分には當倏らないと謙遜してゐられた。成程この時代に今の多くの學生がやるやうなアルバイトに従事された譯ではないが、しかし先生の前半生はこれとは幾らか違つた意味に於て矢張り苦學力行されたと云ふべきである。先生は少年の頃から勃々たる向上心を以て逆境を克服された人であり、あの溫雅な外貌の内に奪ふべからざる意氣や氣慨を藏して生命の飛躍を遂げて來られた人である。かつて何かの折、人は自分の進むべき方向や目標を見定めたなら、少々の犠牲を拂ひ、危險を冒しても突進しなかつたなら何も出来るものではないといふことを私に話されたことがあるが、これは先生の体験から

出たお言葉であつたと云へる。

大學卒業後一年して米國に留學され、ハーバード大學で二ケ年間宗教史家のジ・エフ・モア教授について勉強された。歸朝後青山學院教授、東大講師を経て大正十四年六月、創設日尙ほ淺い九大法文學部に助教授として赴任され、次いで翌年五月教授に進まれた。爾來約二十年間、學生の指導と研究に倦むところなく、その間、昭和五年の初春から約一年半ほど歐洲留學、昭和十年、文學博士の學位を得られることのアつたのは人のよく知るところであらう。かくて先生の後半生は坦々たるものであつたが、晩年は兎角健康を害されがちで、つひに直腸癌の侵すところとなつて昭和二十一年八月十九日に永眠された。

先生は明敏で緻密な頭腦と鋭い洞察力の持主であられた。しかも先生には才に任せぬ篤實さがあつた。修學時代人々が援助を惜しまなかつたのも、人々が一にかうした先生の人物才能を愛したがためと思はれる。物事の判斷が科學的で、正確であられたことも今思ひ出される。日常生活がカント的な几帳面さを以て營まれたことは人の知るところであらう。讀書範圍が廣く、文學や藝術に造詣を持たれたことは先生の著書を繙く者の容易に氣付くところであらう。御自身よく筆の立つ方で、學術論文の如きも些かも晦澁のところがなく、行文は至つて平明達意である。先生は又實際家的手腕をも持つてゐられた。附屬圖書館長時代人事の大刷新に揮はれた鮮かな手腕は知る人ぞ知るところであらう。先生は大學の講義には随分力を竭して準備されたやうである。晩年は大學の都合で毎年繰返し宗教學概論を講ぜられたけれども、その都度内容が變つてゐて決してマンネリズムに陥ることはなかつた。學生

を鍛えられたことは非常なものだ、先生の演習はむしろ難儀のものではあつたが、今では却つて感謝の思ひ出となつてゐる。

先生は學生をよく愛された。これについては私自身多くの思ひ出を持つてゐる。戦時中私が北支派遣部隊にゐた折、これまで自分が特殊部門の研究に携はつてゐたので、この際一般宗教史の本が讀みたいといふやうなことを申上げたところ、早速書店よりゼーデルブロムの「宗教史概論」を求めて送つて頂いたことがある。私は余暇を利しては讀みつゞけ、歸還までに一通り譯了し得たが、お蔭でドイツ語を忘れずに済んだことは今も深く先生に感謝してゐる。又私が暇々中國民衆間の民間信仰を調べてゐる旨お傳へすると、やがて當時出た澤村幸夫氏の「支那民間の神々」を送つて下さつた。この外當時出版になつて私が欲しからうとお考へになつた本や先生が書かれた雜誌論文の抜刷なども時折送つて頂いた。かうしたことによつて私は凡そ學問とは縁遠い境涯にあつて絶えず非常な激勵を受けた。些か私事に亘るけれども、これは私にとつて忘れ得ぬ感謝の思ひ出であるからこゝに書かない譯にはゆかない。しかしかういふことは強ち私一人のことではない。かつてお知合ひの一學生が召集になつた時、關西の旅にあつてそのことを知られた先生は予定を變へて急ぎ歸つて見送られた。又ある折一人の學生が微熱が出ながらも診断の結果を恐れて躊躇してゐた際、先生は私に本人は些か不安なやうだから一緒に大學病院へ行つてよく様子を聞ゐて來て呉れないかと依頼されたこともある。先生は誠に親切で情誼に厚い方だつたと思ふ。固より先生とて一個の人間であるから幾らか短所もあつたであらうが、少くも私には何一つ悪い思ひ出のないことは嬉しいことである。

先生はよく勉強された。極めて短時日の間にギリシヤ語を物にされたり、毎日朝から晩までカントの宗教論と取組んで詳しい解説を一夏で仕上げると云つた精力的な勉強振りだつた。元來餘りお丈夫でなかつたので、かうしたことを始終つゞけ得た譯ではないが、健康の許す限り大いに勉められた。それでお弱かつたに拘らず多くの業績を残された。先生は翻譯物をも含めて十數冊の書物を公けにされたが、「宗教研究」その他の雜誌や講座等に執筆されたものを一々あげたら、それはかなり夥しい數にのぼると思ふ。この中には「キリスト聖語讀本」「信仰・愛・希望」、或は病床に就かれる直前に出て、先生の最後の著述となつた「基督教とは何ぞや」「宗教改革と近代精神」(自由文化叢書)等一般讀書人を對象とした謂はゞ一種の啓蒙書、教養書も含まれてゐる。これ等は先きに言及した先生の實踐的意欲に基く著述と云ひ得るが、しかしそれらは決して單なる説教書や宣教書ではない。それらは學問的述作ではないが、何れも丹念な研究の結果を盛られたもので、何れにも先生の學的態度が窺はれる。

先生の學問的業績はこれを二方面に分つて窺ふことが出来るであらう。その一は宗教哲學の部門であり、他は宗教史の部門である。そしてこの兩者を通し、その綜合として宗教學の組織に向ふことが先生の生涯の學問的課題であつたと思ふ。

先生の宗教哲學上の研究では初期のカント研究と後年の辨證法神學研究とが二つの山をなしてゐる。先生は夙に東大の學生時代にカントに傾倒されたが、これはその後も長く續いて「カントの宗教論」(昭和五年五月刊)となつて結實した。この書はカントの晩年の著作である「單なる理性の限界内に於ける宗教」の詳細な解説と併せてカントの宗教論上の問題を論じ、更にカント的思考方法に基いてカント思想の展開を試みた數篇の論文を收めたもの

である。先生はカントについて多くを學ばれ、カントによつて宗教觀の哲學的基礎が與へられたことを自ら告白してゐられる。けれども先生はカントの理性的宗教には遂に満足され得なかつた。このカントに對する謂はヴァンデイデーゼとして先生の眼前に現はれたものはウイリアム・ジェイムズであつた。先生はカントへの傾倒と略々時を同じくしてジェムズの「宗教經驗の諸相」に隨分心を惹かれた。この本の一つの特色である宗教に於ける神秘的なるもの、非合理的なるものゝ重視が強く先生を引きつけたものであるらしい。そしてジェイムズによつてカントを乗り越え、一見一致し難いこの兩者を結合しようと志されてこの後長く努力を續けられた。先生が早い頃新カント派に共鳴され、この學派に屬して、カントとジェイムズとの結合を試みたトレルチに學び、その「宗教學に於ける心理學と認識論」を「宗教哲學の主要問題」（大正十年一月刊）として譯出されたことにも先生の意圖の程が窺はれるであらう。先生はトレルチが宗教に於ける非合理的のものを無視せず、そこから宗教的アブリオリを發見しようとして試みた点に著目されたが、彼の論理主義には不滿を覺えられた。それで先生は更にシュライエルマッヘル、ウオツパーミン（彼の「現代哲學と自然科學との關係に於ける基督教的神の信仰」の譯がある——大正十年十二月刊）、オットーに學ばれ、これらからも影響を受けられた。先生がこれ等を通つてバルトの客觀主義に著目されるに至るまでの道程を辿つて見ると、そこに一貫したものが求められてゐることに氣付くであらう。

先生の辨證法神學研究は亡くなられる十余年前に遡り、晩年を飾る一業績となつてゐる。そして「宗教と人間」（昭和十五年六月刊）「宗教研究」等に載せられた一連の論文となつて表はれてゐる。先生の辨證法神學研究は吾國の同じい領域の諸研究の間にあつて一異色を呈してゐると云へるであらう。先生はバルトの客觀主義が神學乃至

宗教哲學に於て持つ意義や價值を十分に認められたが、その長所の裡に同時に短所を認められた。バルトの如き徹底した客觀主義からして、客觀と主觀、彼岸と此岸、神と人との交渉——これなくしては宗教生活は成立し得ない——が如何にして可能か。こゝにバルトに對する疑問や不滿を懷かれた。そしてこの點の解決には結局人間學が要請さるべきことに著目され、かくてゴッタルテン、ブルンナー、ブルトマン等が拂ひつゝある努力の裡に辨證法神學が今後進むべき方向を見定められた。

宗教史方面で先生が専ら力を注がれたものは人も知る原始キリスト教の研究である。この研究では數ある論文が「宗教研究」その他の雜誌に寄せられ、又ダイスマンの「イエスとパウロ」（昭和八年九月刊、後に「イエスの宗教とパウロの信仰」と改題——昭和十一年五月刊）の譯も現はれたが、その頂点をなすものは學位論文となつた「使徒パウロの神秘主義」（昭和十年九月刊）である。この本は先生の史的研究の方法が具体的な姿をとつて結實したもので、パウロを彼が生存した時代や環境裡に置いて見ると共に根本資料を深く探つて、パウロの全人格を通してその神秘主義の特質を究明されたものであつて、これまでの吾國のキリスト教の學問的研究中の白眉と云つても強ち過當評價ではなからう。先生はこの後も原始キリスト教を對象として克明な研究を續けられ、イエスとパウロの二大人格を中心とする研究は略々完成して膨大な草稿のまゝ残されてゐる。

以上は先生の宗教學を支へる二大部門である。先生の學問を全般的に見れば、以上二方面の研究は先生が志された宗教學の學的組織への階梯をなすものと見ることが出来るであらう。先生には夙に「宗教學概論」（大正十二年一月刊）の著がある。しかし宗教學は宗教現象の經驗的、科學的研究であり、宗教哲學は宗教の價值問題を取扱ふ

學問であるとして兩者を峻別されたため、この本には後の講義に見るが如き宗教哲學方面は殆ど現はれてゐない。先生はこの舊著には屢々不満を漏らしてゐられた。そして後年の講義で絶えず補正されつゝこれとは別個の宗教學概論の完成を志してゐられた。しかし舊著の根本的立場として採用されたウオツパーミンの宗教心理學的循環や宗教の本質的要素として神秘的經驗を重んずる考は變つてゐない。私は先生が亡くなられてのちその草稿を拜見する機會を得たが、それには廣い視野に立つて諸々の學說や資料が採入れられてゐて、その点宛然宗教學の百科全書の觀を呈してゐる。私は尨大な草稿を読みながら、先生の謙虛にして眞摯な學者的態度に少からず感銘を覺えたのであつた。たゞ先生が餘りにも手を廣げすぎられたために世に公けにし得るまでに至らなかつたことは頗る遺憾のことである。この点先生もさぞお心残りが多かつたであらうと思はれる。

次にこれらの業績に現はれた先生の學風は如何なるものであつたか。これについては簡略ながら告別式の際の弔辭に於て觸れておいたから今はそれを幾分補足するに止めよう。先づ第一に想ひ起すことは先生が學問研究の自由を極度に尊重されたことである。「研究の自由の存在しないところには創造は行はれない」「永遠への恩慕」二〇九頁。従つてそこには學問の進歩はあり得ないといふのが先生の信條であつた。それでこのことは直接指導された學生に對しても獎勵された。先生は學生が御自身の専門領域と異つた領域を選ぶことを喜んで認められた。學生の發表するものについても、その内容の缺點は鋭く追及されたけれども、その間に御自身の嗜好や傾向を強ひようとはなさなかつた。

第二に存在するものを理解するに當つて常に尊重と温情とを以て臨まれたことである。これは先生が單に自ら信仰されたキリスト教以外の宗教にも理解や同情を持たれたことのみに止まらない。様々の學說に對しても虚心恒懷に臨んで、その中に何等かの意義や價值を發見して自ら攝取することに努められたのであつて、先生の著書を繙く者は隨所に先生のこの態度を窺ふことが出来るであらう。

第三に實證的研究を大いに尊重されたことである。成程先生は宗教の究極の理解に於て實證的研究の限界を認識してゐられたが、しかし宗教の理解には經驗を出發点とすべきものと見られ、この限りに於て經驗的、實證的研究を大いに尊重された。この傾向は先生の著書中に於て様々の姿をとつて現はれてゐると思ふ。吾々はこれを先生がバルトの客觀主義に不満を覺えられた点に於て、或は聖書の理解に於てバルトの如く始めから靈的理解に突き進むといふのではなく、それにはグイスマンの如く歴史的、批判的方法を基礎とするといふ立場をとられた点に於ても窺知し得るであらう。

第四は批判的といふことである。この態度は先生が終始堅持され、又絶えず學生にすゝめられたところである。しかし先生の場合は批判のための批判ではなくして創造のための批判であつた。先生は第二に指摘した如き態度を以て先づ多くの學說を正しく内面的に理解することを努められ、その上に正しい批判を加へることを旨とせられた。かくして始めて學問の進歩があり得るといふのが先生の根本信條であつたと云へるであらう。

要之、先生の多くの業績を一貫して流れてゐるこの學風は先生の學問を獨創性に富んだ見識の高いものたらしめてゐるといふことは強ち私一人の獨斷ではなからう。

先生がお亡くなりになつてからこゝに滿二ヶ年の歳月が流れようとしてゐる。回想の糸をたぐりつゝ先生について筆をすゝめてゐると一入感慨深いものがある。拙い身をはげまし、育んで頂いた恩師の長逝が、わが宗教學界にとつても大きな損失であつたことが今更めて顧みられて痛惜の念を覺えざるを得ない。

附記

この一篇を草するに當つて私は出來得る限り先生のお書きになつたものを集めてその重なるものを一通り讀み直して見た。しかし今はその凡てに目を通す餘裕がない。それで先生の業績については概略觸れる程度で、書き足りないところの多々あることは自ら知つてゐる。これを十分つくすには他の機會若くは更に適當な人に俟たねばならない。なほ本篇を草するに當つて現在横須賀にゐられる御令閨を煩はして、先生が御入院の直前に自ら執筆された御履歴と「私の學問」（未定稿）を拜借して多大の参考とすることを得た。こゝにその旨を記して感謝の意を表する。（昭二三・七・二五）